

# 昭和 SPレコードと「子供の世界」

## 童謡レコードと「子供の世界」

SPレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

これまで骨董市や古道具屋で一山いくらという値段で買ってきたレコードの山の中に、時折童謡盤が混じっていたが、ろくに整理もせずに放り投げていた。

ところが、今年長男が誕生すると不思議なもので、それがきっとかけとなつて自分自身童謡盤にも多少の興味を覚えるようになつた。

重吉の児童文学雑誌「赤い鳥」を中心が始まった「赤い鳥童謡運動」である。「赤い鳥」には、有島武郎の「一房の葡萄」や芥川龍之介の「杜子春」などの童話や、北原白秋、西条八十の詩が掲載され、それらの詩に山田耕筰（当時は耕作）、成田為三、弘田龍太郎らが曲を付け、レコードや楽譜が作られた。挿絵は竹久夢二などが描いていたから、今から見れば極めて芸術性の高い贅沢な児童文学雑誌であった。

コードは童謡というよりも、正

確にはお伽歌劇という子供向けのミュージカルであつたが。

寅彦は「蓄音機」という題名の文章の中で、母親を亡くして代に属する読者の方も「からたちの花」という曲をご存じではないかと思う。これは、「赤い鳥」大正十三年七月号に掲載された北原白秋作の詩に山田耕筰が曲を付けたものである。昭和初期に山田耕筰自身のピアノ伴奏で荻野綾子や藤原義江といった声楽家がレコードを吹き込んでいる。その詩は次のとおりである。

筆者と同年代の比較的若い世代に属する読者の方も「からたちの花」という曲をご存じではないかと思う。これは、「赤い鳥」大正十三年七月号に掲載された北原白秋作の詩に山田耕筰が曲を付けたものである。昭和初期に山田耕筰自身のピアノ伴奏で荻野綾子や藤原義江といった声楽家がレコードを吹き込んでいる。その詩は次のとおりである。

(二)

童謡の歴史を辿つてみると、まず、古くから伝承された「わらべうた」や明治以降の「尋常小学唱歌」（いわゆる文部省唱歌）があげられよう。

その後、大正時代になつて自由主義、民主主義の風潮が強ま

ず私の胸の中には美しい『子供の世界』の幻像が描かれた。聞いて居る内に何といふ事なしに、ひとりで涙が出て來た。（中略）聞きながら私は、うちでも一つ蓄音機を買つてやうと思ひ付いた。そして寒い雨の日に銀座へ出掛けた器械と『ドンブラ』のレコードを求めて來た。

太郎劇のレコード「ドンブラコ」（大正三年四月発売）もそうした新しい部類の作品に属す

鈴木三重吉と同じ漱石の門下生であった寺田寅彦が、ある正月に親戚宅でたまたま聞いた桃太郎劇のレコード「ドンブラコ」（寺田寅彦全集文學篇第二卷昭和十二年三月刊、より抜粋）

(四)

「私は其時不思議にお伽歌劇の音樂に引込まれて行つた。十分には聞きとり兼ねる歌詞はどうであつても、唱ふ人の巧拙はどうであつてもそんな事に構は

からたちの花が咲いたよ。

(三)

からたちの花が咲いたよ。

白い、白い、花が咲いたよ。  
からたちのとげはいたいよ。  
青い青い針のとげだよ。  
からたちは煙の垣根よ。  
いつもいつもとほる道だよ。  
まろいまろい金のたまだよ。  
からたちのそばで泣いたよ。  
みんなみんな優しかったよ。  
からたちの花が咲いたよ。  
白い、白い、花が咲いたよ。

成田為三作曲の「犬のお芝居」という昭和六年十二月に発売された童謡レコードがある。歌詞も、次の通り子供には難しい漢語を出来るだけ避け、擬声語、擬態語をふんだんに使つて子供の豊かな想像力を引き出そうとしている。

チヤツポン チヤツポン  
チヤツポンポン

チチンガ チリチリ  
チヤツポンポン

小犬がヒヨコヒヨコ  
立つて出た

紺染の手拭ひ ほほかむり

(五)

子供向けの詩とは言え、情緒溢れる大変美しい詩であり、今日を再度聴いてみたところ、日本語が持つ音の響きの美しさに改めて感嘆した次第である。

## (五)

昭和十二年七月の蘆溝橋事件以降は、残念ながら童謡にも戦時色が現れるようになる。

(六)

回藤原義江の吹き込んだレコードを再度聴いてみたところ、日本語が持つ音の響きの美しさに改めて感嘆した次第である。

「兵隊さんよありがとう」(昭和十四年一月発売)の歌詞は、

「肩を並べて兄さんと今日も学校へ行けるのは兵隊さんのおかげです……」の文句ではじまり、

## (七)

「赤い鳥」の他にも「コドモノクニ」や「コドモアサヒ」、「幼年俱楽部」といった児童向けの雑誌があつたが、それらに掲載された一流詩人による秀作に、これまた一流作曲家が曲をつけ数多くのレコードが発売された。

例えば、手元に北原白秋作詩、

馬」(昭和十五年十一月発売)

童謡歌手中根庸子と小鳩会会員の合唱によるこの曲は、昭和十九年の「お山の杉の子」と同様に曲調は意外に明るいが、その歌詞には「欲しがりません勝つまでは」といった国民精神を内閣情報局が作成した戦時標語のようである。一番と四番の歌詞を紹介する。

太郎さんも花子さんも



る。

(続く)